

自然を信仰し、山村の暮らしを信頼し、篤農を敬愛して、これらに私は人生を導いていただけてきた。山村を愛しく想い、雑穀農耕を中心とする生物文化多様性保全をしながら、環境学習・環境保全による山村振興活動を、関東山地南部、秩父多摩甲斐国立公園周辺の東京都奥多摩町、五日市町、埼玉県大滝村、山梨県小菅村に順次その活動拠点を置き、40年以上にわたって継続してきた。私たちの活動には何千人にも及ぶ子供たち、村人、市民、学生、教職員などが参加して下さった。総額では数億円の公私の資金（国の事業や民間助成事業、個人寄付などを含む）と関係者・ボランティアによる何十年にもわたる労力が協働・提供された。大いに山村の文化継承と経済振興に貢献したはずだ。

ところが、それにもかかわらず、私たちの活動が順調に定着すると、なぜか、ほんの一部の自己保身的な山村有力者から追放の憂き目にあってきた。山村を愛しく想って地道に活動してきたことだから、山村の何事をも悪くは言いたくない。しかし、曖昧模糊とした追放の後退動因を明らかにしない限り、地域振興や「地方創生」などは本質的にはなしえない。教え導いて下さった篤農の皆さんも私も、残り少なくなった人生の時間でこの課題解決をしておかないと、大きな変曲点にある日本の基層文化が喪失してしまう。為政者らは地域を愛しく想う人々やその伝統的基層文化の営みを見捨てておきながら、あまりに無恥にも内容のない「愛国」の言葉だけを声高に言っていることは実に空しい。情理が絶えようとしている、このくにの未来は悲しい。

まるでシーシュポスの神話のように、今また4度目の追放にあおうとしている{注1}。私に徒勞に見える岩上げの苦行を強いるのはギリシャの神々ではなく、名利に憑りつかれた人間たちである点は実に現代的であり、シーシュポスの神話とは違う。大欲望に憑依され、カミ殺しを続ける人間たちが岩を山頂で蹴落とす。岩は山村で、その中には伝統的知識・技能（生物文化多様性）が詰まっている。繰り返しても労するだけにみえる過程が虚しさを超克した時に、自然への信仰を感得し、理知への信頼を認知するのだろう。虚無と便利に抗うのが私の「自味」（地味、滋味）な人生なのだ。私が多くの物者に支えられて生きていること、私も微力ながら少しは物者を支え、愛おしまれ、愛おしんでいること、やっと人生が少しずつ見えてきた気がしている。

私たちのように山村を愛しく想う都市民は山村の心無い有力者には気に入られない。短期間だけ、下働きする「地域おこし協力隊員」は歓迎だが、長期にわたって山村で協働をする都市民は迷惑なのである。村役人様は都市民の税金（地方交付税交付金）をあてにしているので、その上、都市民に私費で山村の為に働かれては居心地が悪いのだろう。彼らは出自の山村を愛しくは想わず、都市に出られなかったことに怨嗟を感じているのだろうか。山村を引け目に思い、都市に従属したいのだろうか。だから、山村を敬

愛する「心」を追放したいのだろうか。なかなか、本当の動因にはたどり着けない。

どこの山村でも直耕してきた多くの篤農とは心を通わせるまで昵懇になり、ご婦人方からも料理を教えていただいたり、農産物やおやつをくださったりと親切にされてきた。しかし、村役人様や大地主様から私たちと篤農たちの協働した環境学習・環境保全による山村振興活動の前進動因による成果はおおかた黙殺されてきた。ムラ社会やタテ社会、イエ制度の封建遺制などと論考されてきたが（中根 1967）、実体験を思い起こしてみると、はっきり言えば、第一の追放動因は山村の屈折した小権力志向の男たちの、まさに低レベルの嫉妬だ。彼らは村内では特段に裕福であるのだから、無欲で名利を求めない者たちへの反感と怖れから、ムラ社会での地位を脅かされると曲解するのだろう。彼らは自然や山村を愛しいとは心底では思っていないのではないのか。このために実にいじましい男の嫉妬であって、彼らに特有の隠微で醜いものだ。なかなか表面に浮かんでこないから、まことに「質」が悪い性癖である。もちろん、私たちは山月記の人喰い虎になった李徴のように尊大な態度（中島 1942）で嫉妬されているなどと、社会的成功者の彼らに対して言っているのではない {注2}。

この心の悪弊を超克しなければ、未来に向けて山村は再生しない。山村を衰退に任せれば、結果的に都市も健康さを失い衰微する。ムラ社会の封建遺制はもちろん日本の都市においても、何ら山村と異なることなく共通に根強く残存している。また、この悪弊は政官界の為政者の方々の世間（ムラ）でも無縁ではない。

地方創生大臣何某が、「学芸員はがん。一掃しないと」とまで公言した。後に撤回して謝罪したそうだが、社会的地位の高い人がいったん無教養な発言や行為をしたら、悪事千里を走ってしまい、取り返しはつかない。目先の金儲けにしか、「観光」、旅の面白さや意義を見ることができないようでは、あまりに無恥で、無教養で、稚拙なことだ。ギャンブルが観光の目玉だという政策はお恥ずかしい。

大人の「知的な観光」は、学芸員たちの学術的な成果に基づく博物館、苦悩の独創に鍛えられた芸術家たちとそれを鑑賞する人々による美術館、大自然を探検して植物学者たちが収集した植物園などに向かうものだ。また、自然と暮らす山村民の生活文化も共感を呼ぶ。これから観光はより「知的な物事」へと深まっていくだろう。たとえば、イギリス人は大人の趣味をもって暮らしているので、図書館、博物館、美術館、植物園などは専門学芸員が調査研究を深め、高い学識を蓄えていないと、知性の高い来館者には応対できない。

しばらく、イギリスのカンタベリーで暮らし、また大陸ヨーロッパ諸国を旅してまわった。保守的というのは保身的とは大いに異なり、伝統を保全しながら、新たな創作として再生する町や人々の暮らしを垣間見ることができた。ヨーロッパの文学、芸術、思想からスポーツ、探検、園芸などまで、王侯貴族に限らず、市民の「遊び」は幅広い。市民のボランティア活動や税金とは別に、任意の寄付がその「遊び」や地域社会を支えている。

森友学園・瑞穂の国〇〇小学院は子供たちに教育勅語を暗誦させる予定であったのだろう。その系列の幼稚園で行ってきたように、幼児に皇民教育を刷り込むのだろう。防衛大臣何某夫妻はこのことに協力したかったのだろう。さらに、この名誉校長を引き受けた総理大臣何某夫人は天皇家を政治権力に利用してきた山縣有朋らの長州軍閥の「思想」の系譜復活を企図して、森友学園に共鳴し、利用しようと思ったのだろう。大方の学校は国会で議決までして廃棄した教育勅語を復活しようとはしないので（昭和 23 年 6 月 19 日衆議院および参議院決議）、彼らの権力思想が望むごくまれな事例を大いに宣伝したかったのだろう。しかし、土地取得に関して疑惑が露見してしまい、身から出た錆とはいえ、現政府は民間の弱小森友学園を破産に追い込んで、不正疑惑を闇に葬ろうとしているのだろうか。政治家に陳情した元理事長も望外から以外に変わった展開に、したたかに対応しているかに見受けられる。事実は隠蔽されたままなので、市民は憶測するしかない。

さらに、失策の上塗り、本音の露呈があろうことに復興大臣何某によって重ねて行われた。原子力発電は「国策」であり、その犠牲となった人々を全面的に支援補償すべき立場、権力保持の当事者であるのに、政府は責任を取らないから、放射能をさけて避難している人に「自主避難は自己責任」と言った。また、災害が東京でなく、「まだ東北で、あっちの方だから良かった」とまで言った。ともにすぐに撤回して、謝罪したようだ。しかし、責任感も信念もない方が選挙で選ばれた国会議員「選良」であるというのは、なんと悲しいこの国、日本ではないのか。虚偽で隠蔽する政治手法「勝てば官軍」は、とりわけ明治維新前夜から薩長・公家の策士によって用いられてきた。下命により策謀悪事により世間を騒がせておきながら、上司が彼らを懲罰して見捨てたいいくつかの哀しい事例があった。最近、こうした歴史事実を明確に論証する著作が世に出始めた。明治維新以来の昭和維新、平成「維新」の系譜を、三度、現代史の変曲点にある今、その功罪をしっかりと批判的に再考証せねばならない。

どうして為政者はこのくにを愛せず、亡国に向かわせているのだろうか。志ある政治家が少なく、選挙民も目先の利害に票を投じるのだから、同罪ということだろう。虚偽・隠蔽に、多大な犠牲を払い、二度と騙されたなどと言い逃れはすまい。市民は自ら学び、考え、自由から逃走しないことだ。この世は厳しく酷い現状もあるが、優しく楽しくし、幸せになる方法は自由に学び、考えることによって見つかる。今まで述べてきたように「かなしい」は「哀しい」「悲しい」「愛しい」などと表記される。不明瞭だが、日本語の繊細なニュアンスが含まれているのだ。このくにが好きな原日本人の私はどの語意においてもかなしい存在だ。

桑原武夫の寄贈蔵書一万冊が廃棄された。置く場所がない、ほとんど誰も読まない、・・・からだという。私は本を読み、考え、書く仕事をしてきた。会ったこともない先人、会うこともできない偉人が多くの経験を書き残しており、彼らの著作からは多くのことを学ぶことができ、またそれらは時空を超えて私たちを導き、励ましてくれてい

る。私は本を捨てることができない。先般、農山漁村文化協会附属の農業図書館も資金不足で土地を売却することになり、廃館になった。10万冊の農業図書があった。日本人はどうしてこれほどまでに、本を読まなくなったのか、哀しくて仕方がない。日本の公教育が強固になるにつれて、このくこの市民は皮肉にも知的劣化を起こしているのだろう。

私たちの「森とむらの図書室」(小菅、藤野分室)にも、国内外で収集した山村調査原票のほか、環境学習や生物文化多様性関係の図書が五千冊ほど所蔵しており、山村振興を願う人々に活用していただきたい。しかし、これまでは蓄積してきた資料を利用する人々は残念ながら少なかった。

現代の日本人に打ち捨てられた過去が、私には失ってはならない未来に想えるのだ。過剰に便利を追い求める現代文明は自然災害、人為災害によりほころび、生き物の文明に移行する秋が必ず来るだろう。預言者でなくとも、論理的に考え、感性的に観れば、このことは自明なことだ。エコミュージアム日本村、日本村塾を勧めてきた。でも、私は国粹主義、日本民族主義、国家主義、いわゆる右翼、そのどれでもない。私は民族の伝統文化には敬意をもっているが、あえて言えば、自然主義、地域主義であり、保守底流であっても、保身に汲々とはしなかった。どの民族でも伝統文化は再創作し再生しながら、継承することが大事だと思う。調査研究で世界各地を巡って、日本に限らず他地域の民族や伝統文化には敬意を払ってきた。

海洋に浮かぶ花綵列島に連なる日本は本来開放的であった。大陸から度重なって、多様な民族集団が移住し、また、ここからも大洋の彼方へと移住していった。山地が多く地理的隔離が容易であったので、人口の少ない先史時代や古代には移住者集団は客人として受け入れられて、各地で安住の地を得てきた。しかし、中世の封建制を経て、ついに近世の幕藩体制が確立し、鎖国によっておおよそこの島々は250年余り閉鎖された。これによりシマ国根性は逆転的内向きに変質し、ムラ社会も排他的に変容した。村外からの移住者への差別は潜在する。

検地により封建・幕藩体制が確立、刀狩によって武器は武士専有になった。必然的に、農民・常民の抵抗は「非暴力・不服従」となる。アメリカのような銃社会ではない。田舎の一揆や都市の打毀しといっても、武士に専有された武器を振り回すようなことはできなかつただろう。圧政に耐え、苛酷な税や飢饉などでやむなく上訴し、おおよそ非暴力・不服従の抵抗であっても、見せしめのために首謀者ら極刑に処せられた。この精神風土が根深く今に続き、お上に異論を唱えることは自粛し、盲従する。なかなか民主主義や個人主義、あるいは自由・平等・友愛の精神は普遍的にならない。脱亜入欧して物欲を昂じただけで、もう一方の教養は高めなかつたのだ。

ご婦人方からは山村の為にありがとう、これからもよろしくと言われることが多い。有力男性からは、たとえ言われても、外交辞令で、本心からではない。老農からは「頭が良い人」は住めないし、追い出されるから、移住するなと言われた。村のお役人様は、

観光客として浅く付き合い、「お金を落としに」来村するのは良いが、「頭が良い人」が深く山村を知り、居つくのは迷惑なのだ。しかし、私たちは相当額のお金を支払ったのだから、金目当てだけが前進動因でない。「頭が良い」訳ではないのだが、やはり心因性の後退動因が潜んでいるということか。排外的な対応により、土地を持たず、生業を持たず、地場産業に安定した職を得られず、移住者は定着できないで、都市に舞い戻るのだろうか。限られた土地であるからには、大勢を受け入れることはできないので、排他的になることは地域社会の維持に不必要なことではなかった。しかし、現在はその対応によって、山村自体を失う状況にある。都市では出生率が低い。農村から子供たちが都市に出てきて、都市人口は増加し続けた時代は終わったのだろう。山村は過疎高齢化により、もう多くの子供たちを都市に送りだせない。都市民の定住を寛大に受け入れ、緩やかな地域社会の変容により、持続と復元を図るのが良い。

何が地域、郷土の仕打ちか。イエ、ムラ社会である故郷の実態を、その極限の現代史に探ってみよう。一ノ瀬（2010）はとても丹念に「銃後の故郷」の実態を検証している〔注3〕。一ノ瀬によれば、＜郷土＞は人々にとって親しいものであったが、同時に徴用された兵士らを拘束し、死へと追いやるといった面も持っていた。戦死者たちの問いに生者が正面から向かい合うことは、「何不自由のない生活」と良心を脅かすから危険であり、戦死者への態度は「感謝」にとどめておくのが適切で、「なぜ」という問いなどは禁句にするのがいちばん賢いのだろうと述べている。結局、一ノ瀬は民俗学の研究には、あえて不遜ないい方をすれば、「政治」の臭いがしないと述べているが、日本民俗学者ではない私は政治を覆い隠し、責任逃れをしたのが、柳田民俗学ではなかったかと勘ぐっている。これに関する事実を明らかにして、根拠事実に基づき批判的に再検討しなければ、日本民俗学は非情理に、また日本人を不幸な戦争へと導くだろう。

イエ、ムラ、シマといった封建遺制によって、自然や山村を大事にしたい私たちの活動が、なぜ、4度もムラから追い出されてきたのか。情けないことに山村は誇りを失っているからだろう。それでも、誇りある思想信条として、私は自分の問題として、山村の誇りを受け継ぎ、伝えたいと考えている。「絆と思いやり」こそが教養であり、これらを失ったから、このくにははしたなくなっているのだ。言葉の心（含意）を歪曲して使う為政者や「学者」が多いので、市民が惑わされる。市民は騙されないように、自分で考え、このためには生きるための学びから逃げてはいけない。

学問の手法は数多あるが、現代においても学問の目的・本質は自ら学び、考えて、教養（思い遣り）を鍛錬し、「自由・平等・友愛」を尊重する、素のままの美しい暮らしを楽しむことにある。立身出世や、もとより名利を求めることではない。現代文明は過剰な便利を追い求めて、「最先端」「最新」機械文明に依存する。人間の仕事は減り、いずれ人間そのものの存在意味も否定され、虚無に蔽われるのだろう。あなたは自分で動かすことのない自動車に乗りたいのか。福祉機器ロボットにあやされたいのか。無人戦闘機に殺されたいのか。AI（人工知能）から勉強を教わりたいのか。

私はほどほどの便利さ加減が良い。人生だって同じだ、自分の意思で、志や信条で暮らしていきたい。次世代に残すものとして、生き物の文明を再生する準備作業をしておきたい。どうか前進動因を励まして、大切に育て、継承してほしい。山村農耕、家族農耕を継承する若い方々に、私は情理や技術を伝えたいと思う。

注1： カミュ (1942) 『シーシュポスの神話』、清水徹訳 (1969)、新潮社

神々がシーシュポスに課した刑罰は、休みなく岩をころがして、ある山の頂まで運び上げるというものであったが、ひとたび山頂にまで達すると、岩はそれ自体の重さでいつも転がり落ちてしまうのであった。無益で希望のない労働ほど怖い懲罰はないと神々が考えたのは、たしかにいくらかはもったもなことであった。

その情熱によって、また同じくその苦しみによって、かれは不条理な英雄なのである。神々に対するかれの侮蔑、死への憎悪、生への情熱が、全身全霊を打ちこんで、しかもなにもものも成就されないという、この言語に絶した責苦をかれに招いたのである。

この神話が悲劇的であるのは、主人公が意識に目覚めているからだ。・・・しかし、かれが悲劇的であるのは、かれが意識的になる稀な瞬間だけだ。ところが、・・・無力でしかも反抗するシーシュポスは、自分の悲惨な在り方をすみずみまで知っている。まさにこの悲惨な在り方を、かれは下山のあいだじゅう考えているのだ。かれを苦しめたにちがいない明徹な視力が、同時に、かれの勝利を完璧なものたらしめる。侮蔑によって乗り超えられぬ運命はないのである。

「私は、すべてよし、と判断する」とオイディプスは言うが、これは〔不条理な精神にとっては〕まさに畏敬すべき言葉だ。この言葉は、人間の残酷で有限な宇宙に響き渡る。・・・この言葉は、不満足感と無益な苦しみへの志向をともなってこの世界に入りこんでいた神を、そこから追放する。この言葉は、運命を人間のなすべきことがらへ、人間たちのあいだで解決されるべきことがらへと変える。

シーシュポスの沈黙の悦びのいっさいがここにある。かれの運命はかれの手に属しているのだ。かれの岩はかれの持ち物なのだ。・・・ぼくはシーシュポスを山の麓にのこそう！ひとはいつも、繰り返し繰り返し、自分の重荷を見いだす。しかしシーシュポスは、神々を否定し、岩を持ち上げるより高次の忠実さをひとにおしえる。かれもまた、すべてよし、と判断しているのだ。このとき以後もはや支配者をもたぬこの宇宙は、かれには不毛だともくだらぬとも思えない。この石の上の結晶のひとつひとつが、夜にみたされたこの山の鉱物質の輝きのひとつひとつが、それだけで、ひとつの世界をかたちづくる。頂上を目がける闘争ただそれだけで、人間の心をみたすのに充分たりるのだ。いまた、シーシュポスは幸福なのだと思わねばならぬ。

注2： 中島敦 (1942) 『山月記』、中央公論社

名聞利養 (略して名利)。

注3：一ノ瀬俊也（2010）『故郷はなぜ兵士を殺したか』、角川書店

日本の〈郷土〉である。個人の感情と国家の論理の間で、郷土がどのようなかたちで兵士たちの死を意味付け、あるいは意味づけなかったことが近現代日本の人びとの戦争観というべきものをいかに規定してきたのかを問いたいと考えている。・・〈郷土〉は人々にとって親しいものであったけれど、同時に彼らを拘束し、死へと追いやるという面も持っていた。・・・民俗学の研究には、あえて不遜ないい方をすれば、「政治」の臭いがしないのである。さらにいえば、そこには、時に「生きている兵士」の視点が欠落しているように思われる。つまり地域社会——〈郷土〉における戦争受容の問題を考えるのであれば、生きた兵士の苦難と死んだ兵士の犠牲とはどのような相互関連性を持ちながら正当化されていったのが、統一的視野のもとに分析されねばならないと考える。・・彼らは対外戦争が終わるたびに人びとの脳裡から忘れ去られ、のちにある政治的思惑のもとに蘇ってきただけにすぎない。

確かに彼・彼女たちにとって〈郷土〉の慰問などの援護は、あるべき兵士・銃後の遺家族として生きることを強いる「監視」であったが、一方で自己の犠牲や苦難の承認、意味付けという意味合いもあり、ゆえに希求されたのであろう。・・・まさに「天皇陛下万歳」と叫んでから事切れるという死の様式美を〈郷土〉を挙げて賛美し、記憶するという図式である。・・その中で遺族は感情を押し隠してけなげに振る舞う→戦争への怨嗟・反感は表面化しない、という一連のサイクルが完成したかのようである。

確かに死んだ弟は「国の礎」となったかもしれないし、先の戦争は「侵略戦争」ではなかったのかもしれない。しかし、侵略戦争ではなかったというのなら、いったい何のための戦争であり、戦死だったのだろうか。彼女が弟に代わって突きつけたいくつかの「なぜ」について、〈郷土〉も国も戦後五〇年間を通じて答えてこなかったし、おそらくこれからも答えることのないまま、時間だけが流れてゆく。・・・戦死者たちの問いに生者が正面から向かい合うことは、自分の「何不自由のない生活」と良心を脅かすから危険である。そうであるならば、戦後五〇年間という節目の年における戦死者への態度は「感謝」にとどめておくのが適切なのであって、「なぜ」という問いなどは禁句にするのがいちばん賢いだろう。・・・そもそも日本社会は明治から現代にいたるまで、生者同士の「政治」から離れ、戦死者の立場になって「慰霊」なり「追悼」なりの論理を構想してきたことなど、実は一回もなかったのではないか、ということになる。